

No.

200

平成16年1月発行

老人研情報

発行 東京都老人総合研究所 広報委員会

平成16年の年頭に当って



所長 林 泰史

新年おめでとうございます。東京都老人総合研究所所員は例年に比べて長い年末年始休暇期間中に十分に英気を養い、新年の目標に向かって新たな決意で仕事をスタートさせております。他方、年末・年始の期間中にも出勤し仕事を継続して来た所員も多数にのぼり研究への意欲は盛んです。

今年はグループ研究の収穫の年に当り、研究員は26に細分化された得意分野で存分に能力を発揮し成果を上げています。1～2ヶ月後には外部評価委員の先生方に御足労を願って、研究全てについて中間評価を行う予定です。この中間評価が16年度のグループ研究の最終年度のみならず17年度以降の新研究体制の枠組みにも影響することになっています。従って、研究の獨創性、科学性、そして都民への有益性について手短に分かり易く提示し評価を受けるべく準備中です。

平成16年は老化に関わるコア研究体制確立に向けた準備の年でもありますので、これとグループ研究の完成といった二重の苦しみに研究所は耐えなければならない年でもあります。老化ゲノムの解明、大都市高齢

者の自立・社会参加支援といった2つのコア研究の課題は進展する21世紀の高齢社会では重要、かつ喫緊のテーマであり、また平成15年度の都政に対する都民要望の1位である高齢者対策に応えるものでもあります。

平成17年度からスタートする2つのコア研究体制では今までの研究組織の所属が変わる程度といった安易な考え方を棄てて、自分の得意とする研究領域とコア研究の目的とをハーモナイズさせ、老人総合研究所の総力を結集して成果を挙げていく所存です。昨年11月に東京都から出された第2次都庁改革アクションプランでは、東京都老人総合研究所を所管する東京都高齢者研究・福祉振興財団と健康局の東京都医学研究機構とが統合することになっています。第2次アクションプランでは種々な効果が期待されていますが、私達、東京都老人総合研究所所員は21世紀に実効性のある都政を進めるため、現場から発言・提言をしていくことと、そのために現場の風土について意識改革をしていくことの2つで寄与していくべきであると考えています。このことから、平成16年は26のグループ研究を2つのコア研究に再結集する準備年であり、また新たな意識を涵養する風土作り元年であるように祈念し、「老人研情報」200号記念のメッセージおよび年頭の挨拶と致します。

- 新年あいさつ 「平成16年の年頭に当って」..... 1
- ちょっとQ&A 「ヒマラヤ山脈を越える渡り鳥がいる」..... 2
- 200号記念 「さざれ石 ^{いわお} 巖となりぬ200号」 8

目次

老年学公開講座レポート	4	平成15年度東京都職員表彰	7
平成15年度厚生労働科学研究補助金(追加) ...	5	新企画 老人研トリア	
表彰	6	「老人研には百寿者博物館がある」.....	7

ヒマラヤ山脈を越える渡り鳥がいる - 極寒と低酸素への対応策は? -

運動・自律機能相関研究グループ 野本 茂樹

Q. ヒマラヤの気象条件は?

A. 地上の温度が15 のとき、高度8000mでは気温は氷点下37 になります。さらにヒマラヤでは常にジェット気流が吹いているので体感温度は氷点下50 以下になります。一方、酸素濃度は地上の約1/3です。このような気象条件の中で人が生きていくには分厚い防寒服と酸素ボンベが必要となります。

Q. こんな気象条件の中で渡りをする鳥がいるのですか?

A. はい、います。アネハヅル(学名: *Anthropoides virgo*)、ソデグロヅル(学名: *Grus leucogeranus*)、インドガン(学名: *Anser indicus*)などがヒマラヤ山脈を越えて渡りをしています。

Q. ヒマラヤ山脈を越える渡り鳥の防寒対策は?

A. 羽毛です。羽毛には正羽と綿羽があります。正羽(feather)は風切り羽や尾羽それに胸や腹などの体羽で羽軸(先端は羽ペンとして使われます)を備えた羽のことです。物理的に強いのが特徴です。一方、綿羽(down)には羽軸がなく、物理的な摩擦や外部の衝撃に弱く、皮膚を保護する働きはありません。しかし、ダウンジャケットや羽毛布団に使われているように収縮力に富むうえ保温力は抜群です。鳥類は暑いときには正羽を寝かせ空気層を薄くしますが、寒いときには正羽を立ててその基部にある綿羽を広げて空気層を厚くして体温を保ちます。以前、体重が等しいラットとハトで行った実験で、0 ~ 30 の環境温の変化に対してラットの体温は不規則に変動するのに対して、ハトの体温は直線的に変化することが分かりました。このことから鳥類は優れた体温調節機構を持っていることが分かります。ヒマラヤの極寒でも渡り鳥は素晴らしい体温保持能力を持っているものと考えられます。さらに飛ぶことにより体内には過剰の熱が産生されるので、防寒対策は完全だと考えられます。

Q. 酸素濃度が地上の約1/3しかないのに、どのようにして必要な酸素を確保するのですか?

A. まず呼吸方法に違いがあります。哺乳類では1回の呼吸で1度のガス交換しかできませんが、鳥類では1回の呼吸で2度のガス交換が可能です。さらに哺乳類では動脈血中の酸素濃度は吐く息の酸素濃度より低いのですが、鳥類では動脈血中の酸素濃度が吐く息の酸素濃度より高くなります。

Q. どうして2度もガス交換できるのですか?

A. それは鳥類が気嚢(air sac)を備えているからです。哺乳類

の呼吸器系は、気管と肺からなっていますが、鳥類の呼吸器系は気管と肺(副気管支という)それにその奥にある気嚢からなっています。一般に気嚢は5対ありますが、図1では簡略化して前部気嚢群と後部気嚢群の2つにまとめてあります。空気を吸う場合、空気が気管を通り副気管支へ向かうものと後部気嚢に向かうものに分かれます。副気管支でガス交換が行われた後、前部気嚢群に空気が貯められます。吐く場合は、前部気嚢群の中の空気が直接気管へ送られますが、後部気嚢群の中の空気が副気管支を通じてガス交換した後、気管へ送られます。このように鳥類では1回の呼吸で2度のガス交換が行われます。なお、哺乳類は横隔膜を上下させることにより呼吸しますが、鳥類には横隔膜が無いので体壁を収縮弛緩させることによって呼吸しています。

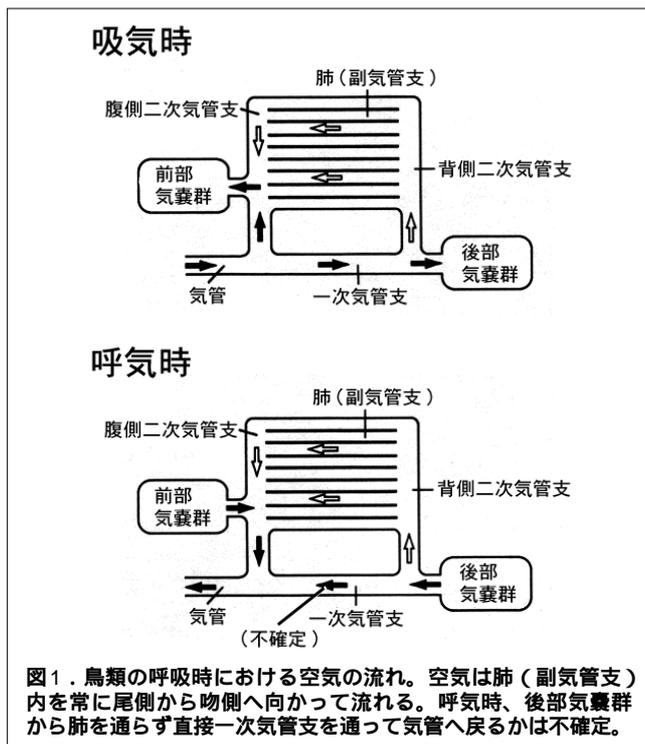
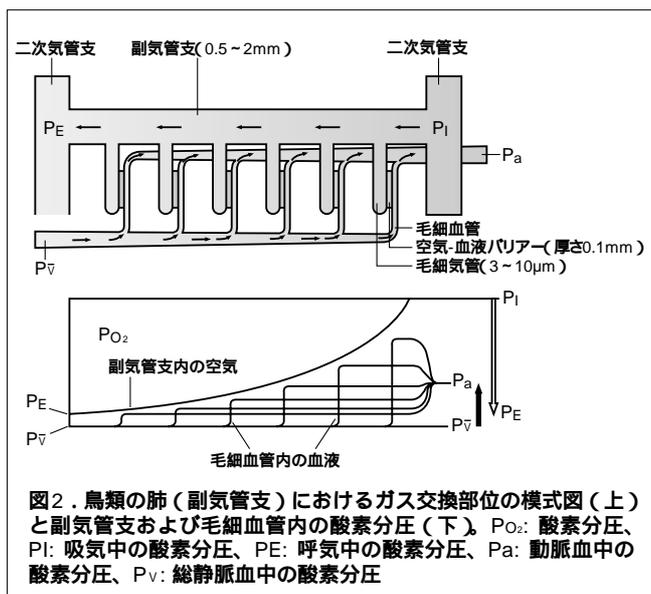


図1. 鳥類の呼吸時における空気の流れ。空気は肺(副気管支)内を常に尾側から吻側へ向かって流れる。呼気時、後部気嚢群から肺を通らず直接一次気管支を通じて気管へ戻るかは不確定。

Q. どうして鳥類では動脈血中の酸素濃度が吐く息の中の酸素濃度より高くなるのですか?

A. 哺乳類では肺胞でガス交換が行われます。すなわち肺胞の周りにある毛細血管へ拡散作用によって酸素が取り込まれます。このため、動脈血中の酸素濃度は肺胞内の空気の酸素濃度より高くなることはありません。しかし、鳥類では動脈血中の酸素濃度が呼気中の酸素濃度より高くなります。その訳は、副気管支内で対向流性ガス交換(counter current gas exchange system)を行っているからです。図2を使って説明します。副気管支内で空気

は右から左へ向かって流れています。それに対して血液は左から右へ向かって流れます。その途中で空気-血液バリアーを介して酸素は拡散作用によって血液に取り込まれます。右側の二次気管支内の酸素濃度を P_i 、左側の二次気管支内の酸素濃度を P_e とします。また左から流れ込む血液内の酸素濃度を P_v 、右側の流れ出る血液内の酸素濃度を P_a とします。一番左側にある空気-血液バリアーでは血液が取り込む酸素の量はごく僅かですが、右側にいくほど取り込む酸素の量が徐々に多くなっていきます。最終的に副気管支から出ていく血液の酸素濃度は一番左でガス交換したものから一番右でガス交換したものの平均値となります。右端の二本の矢印をみると、 P_a の方が P_e より高い値を示していることがお分かりいただけると思います。



Q. すべての鳥類は気嚢を持っているし対向流性ガス交換を行っているのにヒマラヤを越えられないのはなぜですか？

A. 渡りをするほとんどの鳥類は高度1,800m以下を飛んでいます。高度8,000mを飛べる鳥類には気嚢と対向流性ガス交換以外にヘモグロビン(hemoglobin)に特徴があります。図3に鳥類のヘモグロビンの酸素解離曲線を示してあります。インドガンは高地性鳥類で、体の大きさがほぼ同じ北京ダックとシジュウカラガンは低地性鳥類です。インドガンのヘモグロビンは低地性鳥類のものにくらべて低い酸素分圧(例えば50Torr*)で、高い酸素飽和度(約70% > 低地性鳥類は約50%)に達しています。すなわち、インドガンのヘモグロビンは酸素との結合能力が高いことになります。しかし、この性質はこのままでは血液が組織や細胞に送られたとき、組織や細胞にわたす酸素の量が減ることになります。けれどももう一度インドガンの酸素解離曲線を見てみると、曲線の傾きが急峻であることに気がつきます。また、酸素分圧が低いところ(例えば20Torr*)ではインドガンと低地性鳥類の酸素飽和度にはあまり差がないことが分かります(各約13%と8%)。すなわち、インドガンのヘモグロビンは酸素分圧の高いところでは酸素と結合しやすく、酸素分圧が低い細胞レベルでは低地性鳥類と同程度に酸素を細胞に送り込むことができるという特徴をもっています。このことから

インドガンは低酸素状態でも他の鳥類にくらべより多くの酸素を体内に取り込めることがお分かりいただけると思います。*: Torrは圧力の単位でmmHgとほぼ同一。

Q. 高地性鳥類のヘモグロビンの酸素親和性が高いのはどうしてですか？

A. 酸素親和性を高める生化学的要因として、酸素親和性が高くなるような特殊な分子構造をもったヘモグロビンを備えている。酸素親和性を低下させる赤血球中の有機リン酸塩(2,3-ビスホスホグリセレート、アデニン3リン酸、イノシール5リン酸など)の濃度が低い、上記の有機リン酸塩との結合能力が低いヘモグロビンを備えていることなどが考えられます。インドガンのヘモグロビンの場合、がその主な原因であることが明らかになっています。この性質を担う遺伝子が見つければ、肺結核などで呼吸機能が低下した患者さんに遺伝子治療を行うことで酸素ポンペから解放しあげることができるかも知れません。

Q. 高地性鳥類だけがなぜ特殊なヘモグロビンを備えることができたのでしょうか？

A. その本当の理由は分かりません。インドガンは少なくとも鮮新世(170万~500万年前)後期に出現した古来の鳥類で、氷河期は別として出現以来ずっと同じ越冬地と繁殖地を行き来し、同じ渡りのルートを使ってきたようです。インドガンが出現した頃、繁殖地であるチベット高原は比較的緑の多い温暖な土地で、ヒマラヤ山脈も現在よりずっと低かったと考えられます。しかし更新世(1万~170万年前)後期に入ると、造山活動が始まりチベット高原とヒマラヤ山脈は数千年かかってほぼ現在の高さになりました。そのためインドガンはヒマラヤ山脈を越えるのに、より高く飛ぶことを余儀なくされたのではないのでしょうか。このような長期間にわたるゆっくりとした地質学的な変化が、他の生理学的および形態的適応と同様に、高所すなわち低酸素に対するヘモグロビンの酸素親和性に進化の淘汰圧を与えたのではないのでしょうか。

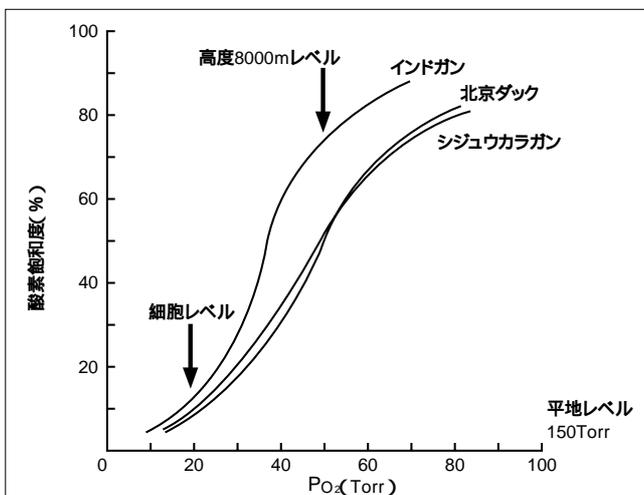


図3. 鳥類ヘモグロビンの酸素解離曲線。 P_{O_2} : 酸素分圧、平地レベルの酸素分圧は150 Torr、高度8000mでは50 Torr、細胞レベルでは20 Torr。インドガン: 高地性鳥類、北京ダックとシジュウカラガン: 低地性鳥類

第74回老年学公開講座

11月7日(金)両国の江戸東京博物館ホールにおいて「がんを治す、傷を治す! 健康を支える糖鎖」が開催された。最近TV、雑誌等でも話題となっている「糖鎖」を巡り、安藤進副所長の司会で「糖鎖と健康」(老人研・増殖分化制御研究グループリーダー・古川清)、「がんと糖鎖」(東京都老人医療センター血液科部長・太田雅嗣)、「傷を治す糖鎖」(防衛医科大学校研究センター教授・石原雅之)の講演が行われた。いくぶん専門的内容であるにもかかわらず、400名近い参加者があり、当日の講演集も入場者ほぼ全員に購入頂いた。また講演者の古川副参事研究員は職員表紙(p.7)をこの当日受賞した。



会場の模様

第75回老年学公開講座



質疑応答

本年度最後の公開講座「長寿社会を生き抜く! 85歳までのコツ、85歳からのコツ」が12月4日(木)板橋区立文化会館大ホールで開催され、400名以上の参加をいただいた。高齢者(65歳以上)のうちでも特に80ないし85歳以上を「超高齢者」と呼ぶ。超高齢者は近年増加の一途をたどっているが、超高齢期に達しても充実した生活を送るにはどのような心構えや準備が必要か? 地元板橋区の高齢者を対象に行われた調査結果を披露しながら、実際の筋肉トレーニング実技も含めた講演が行われた。今回の講演者は三人とも老人研の研究者で、社会参加・介護基盤研究グループリーダー・小林江里香、疫学・福祉・政策研究グループ・古名丈人、痴呆介入研究グループ・権藤恭之の各氏であった。司会は鈴木隆雄副所長。

本年度最後の公開講座「長寿社会を生き抜く! 85歳までのコツ、85歳からのコツ」が12月4日(木)板橋区立文化会館大ホールで開催され、400名以上の参加をいただいた。高齢者(65歳以上)のうちでも特に80ないし85歳以上を「超高齢者」と呼ぶ。超高齢者は近年増加の一途をたどっているが、超高齢期に達しても充実した生活を送るにはどのような心構えや準備が必要か?

地元板橋区の高齢者を対象に行われた調査結果を披露しながら、実際の筋肉トレーニング実技



古名講師によるスクワットの実技指導

アジア・オセアニア国際老年学会参加者による 老人研見学ツアー

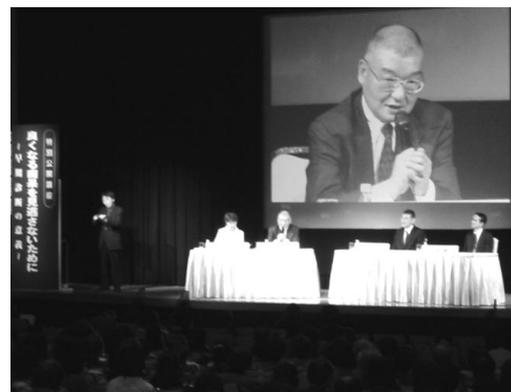
アジア・オセアニア国際老年学会は、アジアオセアニア各国で開催される権威ある学会で、本年度の第7回は、日本での開催となった。会期中の11月26日(火)午後、各国からの学会参加者(希望者)30名の老人研来訪があった。一行は、鈴木隆雄副所長による老人研全体についてのお話ののち、老化臨床神経科学研究グループ、介護予防緊急対策室、ポジトロン医学研究施設を見学した。参加者は熱心にメモを取ったり、写真やビデオで所内を撮影したりと、老人研に対する熱心な興味が伺われた。



老化臨床神経科学研究グループで説明に耳を傾ける一行

特別公開講座

12月1日(月) 日本社会教育会館(一ツ橋ホール)において「良くなる痴呆を見逃さないために～早期診断の意義～」の公開講座が開催された。あいにくの雨模様だったが、約800名の参加者を迎えた。「良くなる痴呆はこのくらいいる」(日本医科大学付属第二病院助教授・北村伸)、「アルツハイマー型痴呆はここまで治療できる」(都立保健科学大学教授・繁田雅弘)、「本人と家族にとっての早期診断の意義」(老人研痴呆介入研究グループリーダー、長期プロジェクト“老人性痴呆に関する総合的研究”リーダー・本間昭)の講演が相次いで行われた。痴呆の早期診断の必要性、治療の可能性について具体例を交えた密度の高いお話に、引き続き行われた質疑応答にも聴衆からたくさんの質問が寄せられ、関心の高さがうかがわれた。



質疑応答 後方は大スクリーンに映る本間氏



講演には手話通訳がつく

「本人と家族にとっての早期診断の意義」(老人研痴呆介入研究グループリーダー、長期プロジェクト“老人性痴呆に関する総合的研究”リーダー・本間昭)の講演が相次いで行われた。痴呆の早期診断の必要性、治療の可能性について具体例を交えた密度の高いお話に、引き続き行われた質疑応答にも聴衆からたくさんの質問が寄せられ、関心の高さがうかがわれた。

平成 15 年度厚生労働科学研究補助金の採択状況 (追加)

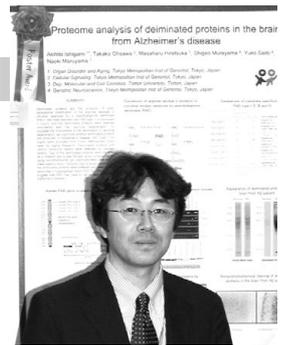
15.8.21 現在

氏名	所属研究グループ	区分	課題名	決定金額(持分) 千円単位
長 寿 科 学 総 合				
鈴木隆雄	(疫学・福祉・政策)	分担研究者	老化因子と加齢に伴う身体機能変化に関する 長期縦断的疫学研究	1,000
が ん 予 防 等 健 康 科 学 総 合				
水野正一	(長期プロジェクト)	分担研究者	がん予防対策のためのがん罹患・死亡動向の実態把握の研究	1,000
新開省二	(地域保健)	主任研究者	インターネットおよび情報端末機器を用いた中高年期の健康 づくり支援システムの開発	6,990
難 治 性 疾 患 克 服				
村山繁雄	(老化臨床)	分担研究者	プリオン病及び遅発性ウイルス感染に関する研究	2,000
効 果 的 医 療 技 術				
新名理恵	(痴呆介入)	分担研究者	痴呆性高齢者を対象とした新規在宅支援サービスの開発	2,300
高橋龍太郎	(介護生活基盤)	分担研究者	寝たきりプロセスの解明と主たる因子に対する介護効果に 関する研究	2,000
矢富直美	(痴呆介入)	分担研究者	痴呆性疾患の危険因子と予防介入	6,000
鈴木隆雄	(疫学・福祉・政策)	分担研究者	多施設による大腿骨頸部骨折の長期機能予後および生命予後 に対する在宅リハビリテーションによる介入効果の検討	0

第7回アジア・オセアニア国際老年学会議 ポスター賞の受賞

加齢臓器障害研究グループ 石神昭人

「Proteome analysis of deiminated proteins in Alzheimer's disease」という研究課題でポスター賞を受賞しました。私たちはアルツハイマー病の発症原因を脱イミノ化蛋白質の出現、蓄積というまったく新しい発想から研究に取り組んでいます。この研究内容は、昨年11月発行「老人研情報199号」のトピックスでも大澤多加子博士によりわかりやすく解説しています。本研究は、遺伝子情報研究グループ、老化臨床神経科学研究グループ、プロテオーム共同研究グループとの共同研究で行っております。最後にこの場を借りて、これまで研究を支えて下さった丸山直記先生、グループの皆様、学生の方々に深謝いたします。



第7回アジア・オセアニア国際老年学会議 ポスター賞の受賞

地域保健研究グループ 寶 貴旺 (とう きおう)

この度、表記国際会議で発表した「Serum beta2-microglobulin as a novel risk factor for cerebral infarction among apparently healthy community-dwelling adults」に対しポスター賞を受賞しました。これまで、当研究グループでは、血清 2 マイクログロブリン(2-M)が良い生物学的老化指標であり、また、高齢期のADL障害発生の予知因子でもあることを見いだしていました。本研究は、ADL障害の主要因の一つである脳梗塞の新規発症と 2-Mとの関連をnested case-control studyにより検討し、血清 2-Mの意義をさらに明らかにしようとしたものです。その結果、

2-Mが脳梗塞の新たな予知因子であることがわかりました。現在、2 Mがどのタイプの脳卒中とより関連が深いのか、そのメカニズムは何かを探るために、老人医療センター及び豊島病院と共同で研究を行っているところです。この場を借りて、一連の研究を指導して下さいいる新開省ニグループリーダーおよびグループ員の皆様に深謝いたします。(非常勤研究員)



第41回日本核医学賞の受賞

ボジロン医学研究施設で行った研究「Midbrain hypometabolism: An early diagnostic sign for progressive supranuclear palsy」により、本年の日本核医学会賞を受賞いたしました。進行性核上性麻痺は、パーキンソン病や痴呆を呈する他の疾患との鑑別が難しく、誤診が多いことが問題です。そこで、[18F]FDG PETと画像統計ソフトのSPMを用いて、進行性核上性麻痺のブドウ糖代謝低下の特徴と、罹病期間・症状との関係を検討しました。その結果、中脳のブドウ糖代謝の低下は、病初期より認められることが示唆されました。

今回の受賞は、協力して頂いたボジロン医学研究グループのスタッフのご尽力の賜物であり、ここに深謝いたします。(非常勤研究員)



第34回日本消化吸収学会 第6回学会賞の受賞

平成15年10月18日に行われた第34回日本消化吸収学会総会にて、「第6回日本消化吸収学会学会賞」をいただきました。対象となった研究テーマは、「コレシストキニンA/B受容体機能のエネルギー代謝に対する関与」です。この賞は、日本消化吸収学会の選考委員6名がそれぞれ点数をつけ、総合点のもっとも高かった者1名に授与されるもので、公募制、自薦、他薦ではありません。従って、あてにしたこともなければ、選考委員がどなたなのか当日まで知りませんでした。立派な賞状と副賞はもとより、こつこつと積み重ねた結果を評価していただいた、ということは、大変に嬉しいできごとでした。この研究は、モデルラットとノックアウトマウスを使って行ってきた実験成果なので、研究室のスタッフ、研究生、臨時職員(といっても、もう何年にもなります)の協力あっての賞でした。紙面をお借りして感謝の意をあらわしたいと思います。

第34回日本消化吸収学会 Travel Award の受賞

生体機能と加齢研究グループ 太田稔、関目綾子

同学会にて「日本消化吸収学会 Travel Award」が太田稔、関目綾子(大学院生)に授与された。生体機能と加齢研究グループで行った、中等度の肥満と18週齢からNIDDMを発症するOLETFラットと、対照LETOラットについて、3000m走行という軽度運動負荷が、加齢に伴って生じる基礎代謝の低下を軽減することができるかどうかを比較検討した研究「日常作業相当のエネルギー消費負荷による、肥満OLETFラットの加齢に伴う基礎代謝低下抑制」という発表に対して太田稔に授与された。太田の受賞は二年連続となった。シュークロスの消化吸収を妨げる効果のあるL-アラビノースの長期投与が肥満・糖尿病の発症予防に効果的であるかどうか検討した研究「肥満・糖尿病自然発症モデルラットOLETFにおけるL-アラビノース長期投与の効果」という発表に対して関目綾子に授与された。

生命科学啓明賞を受賞して

加齢臓器障害研究グループ 石神昭人

この度、財団法人啓明会(理事長 池上四郎先生(帝京大学薬学部教授))から「平成15年度生命科学啓明賞」を頂きました。受賞理由は、現在までに行った老化研究を中心とした分子生物学的研究に於いて優れた研究成果を上げ、生命科学の発展に大きな貢献をなしたことです。財団法人啓明会は、1918(大正7年)年8月8日に日本で初めて設立された文部省管轄の財団です。ちなみに、第1回受賞者(平成6年度)は、ノーベル化学賞受賞者の野依良治先生(現、理化学研究所理事長)、松尾寿之先生(前宮崎医科大学学長)です。第3回までは、財団で選出していましたが、それ以降は、50才以下の若手から選出されています。この受賞を励みに、今後も生命科学の発展に貢献できるような研究を展開していきたいと考えています。



写真は、創立寄附者赤星鉄馬氏の肖像が刻印された純銀メダル

平成15年度東京都職員表彰(知事表彰)

研究、発明・発見の分野で、増殖分化制御研究グループリーダー・古川清 副参事研究員が「糖鎖を使った乳癌の検査方法の開発」についての功勞により、今年度の職員表彰を受けました。11月7日(金)都庁で行われた授賞式で、古川副参事は受賞者のトップを切って石原慎太郎都知事から賞状を授与されました。乳癌にはこれまで、診断に有用な腫瘍マーカーがありませんでした。古川副参事は、乳腺組織中のある特殊な糖鎖に着目し、癌の悪性度が高くなるに連



れて、その糖鎖が減少、消失することを突き止めました。この検査法につき現在、国際特許を出願中で、さらに病院等でも利用できる、より簡便な検査法を開発中です。老人研からの職員表彰受賞はこれで3年連続となりました。



新企画

老人研トリビア

老人研には百寿者博物館がある

今巷では、トリビアの泉なるものが流行っている。世界的に権威のある科学雑誌「ネイチャー」の日本語版にも類似の企画が登場した。いささか出遅れの感もあるが、我々も柳の下のドジョウを狙い、ここに老人研トリビアのコーナーを設けることとした。

老人研4階の痴呆介入研究グループの部屋の前には、「世界で唯一の」と銘打った博物館ならぬ、展示ブースが置かれている(写真)。展示物は研究員達がこれまで訪問した百歳高齢者に

いただいた貴重な作品や写真、そして国内外の百寿者に纏わる文献が所蔵されている。ちなみに現在は、新春企画特別展として、百寿や長寿の冠をもつ食品が展示されている。老人研にお越しの方は、ぜひお立ち寄り下さい。そして、くれぐれも「世界で唯一」を「世界一小さな」と読み違えないようお願いしたい。



いわお さざれ石 巖となりぬ200号

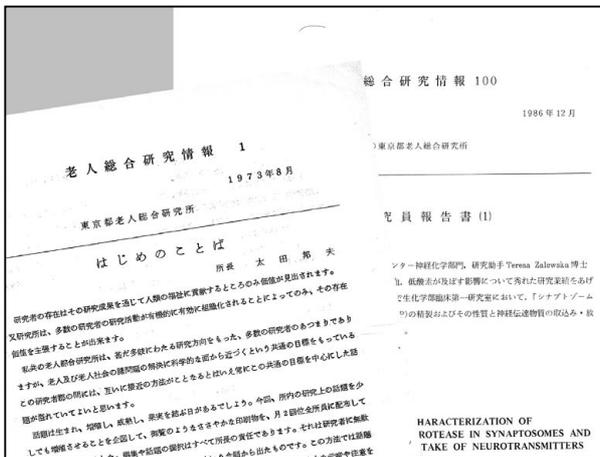
広報委員長 辰巳 格 (言語・認知・脳機能研究グループリーダー)

老人研情報は、今号で200号になるという。驚いたことに1号からすべて保存してある。老人研が設立されたのは1972年のはずで、その翌年の8月にB5版の1号が発刊されている。初代所長の太田邦夫先生が発行の趣旨を書かれている。研究者の時間を取らないように、内容は太田先生自身が決めるとあった。当時は原則として毎月発行され、名称も「老人研情報」ではなく、「老人総合研究情報」であった。

1号が1973年の発刊なら、老人研情報は30周年でもあるはず。ご存知のように、このところの老人研を取り巻く状況は厳しく、不確定要素が多い。編集委員会としては、逆説的に、ええい、何でもいから祝っちゃおう、ということかもしれない。めでたさも中くらいなりおらが春、といったところか。もっとも、馬齢を重ねすぎた私のような古者には(古老というのはしかし失礼な言葉ではある)、200号は、冥土の旅の一里塚……、の方が似合いかもしれない。

初期のころ、群を抜いて分厚い号があり、ページをめくってみると、事務の次長、係長さんたちが、行政と研究に関する論文を寄せ、行政組織(地方自治体)に馴染みにくい「研究」を、いかに行政側を変革して馴染ませるかの努力・試論を展開されている。力作で感心してしまう。いまだに不変のテーマのようだ。また、当時、都庁に研究調整室が作られ、都の科学技術政策を検討し、老人研や神経研、精神研の調整を図る組織だったようだ。その頃の老人研の職員数は約200名とあったから、30年で35%ほど削減されたわけだ。

この機会に別の古い資料もいろいろ見た。室長会(いまの幹部会にあたる。幹部会という名称は、ちょっとこわい)の写真もあった。老化研究の大御所たちが写っている。驚天動地とでも言うべきは、白衣を着た大先輩たちが、たばこを吸いながら、人によってはくわえたばこで会議に臨んでいる図である。迫力がある。当時の方がずっと「幹部会」



「老人総合研究情報」1号と100号



「老研だより(第14号)」1976年

という印象である。当時の会議の様子は自分の目でも見ているはずだが、全館禁煙にすでに馴染んでしまったためか、まったく思い出さない。適応が早いというのか、単に物忘れがひどいだけなのか・・・。

これとは別に昨年度に退職された写真室の藤田喜弘さんが中心になり発行していた「老研だより」というのもあった。これはB4版の手書きのもの。研究室とメンバーの紹介が主である。これを「老人研情報」と勘違いしている人は私を含め多いようだ。小さくではあるがメンバーの顔写真が載っており、顔見知りの人の、昔の、それもはるかに遠い昔の写真には声をあげるか、声を呑む。

「老人研情報」が変わり始めたのは、比較的最近である。きっかけは初代の広報委員長の木村成道先生が、年報や「老人研情報」などの発行に研究者が主体的に関わるべきだと考え、研究者主体の広報委員会を発足させたことによる。1996年も押し詰まったクリスマス・イブのことである。それから公開講座、科学技術週間参加行事、「老人研情報」、年報、ホームページなど、いろいろなことを広報委員会が担当することになった。

私は5年前に二代目を襲名した。任期2年のはずなのに、組織改編が落ち着くまでということで5年にもなっている。ホームページ、公開講座などを従来方式から大幅に改めたが、「老人研情報」でも各種の試みを始めた。表紙を視覚的にするため、デザインを建築家の前川佳史研究員にお願いし、名称も由緒ある「老人総合研究情報」から「老人研情報」に改めた。その後も表紙を写真室の藤田さんのデザインに変更し、さらにデザインとレイアウトを外注し現在のものになった。先代の鈴木統一所長

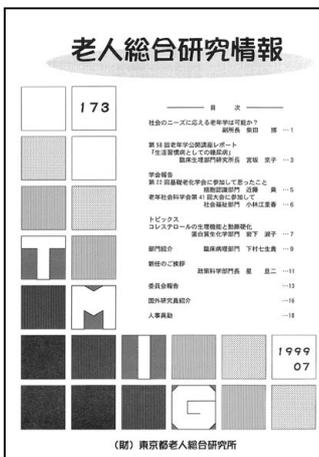
の考えで、読んで貰えるようにと内容も外部向けに変え、配布先も学界の重鎮の方々やマスコミ・出版社、友の会会員などに抜本的に改めた。

記事は、「中学生にも分かるように」という方針で執筆をお願いしている。そのため、分野が全く異なる研究者に重点的に読んで貰い、必要なら原稿の修正をお願いしている。幹部会などを通じ、分かりやすく再三お願いしているつもりだが、恐れ多くも、あるいは命知らずにも玉稿に手を加えて持参すると、編集担当はときにひどく怒られる。編集は、3K(キレそう、こらえて、勘弁して)の仕事である。「中学生にも分かるように」は所としての方針である。原稿を依頼されたときにはよろしく願います。

3年前まで、編集は実質的に広報委員長と事務の担当者とでやっていたが、二代目はなにしろ古者なので、若い感覚に期待し、2年前から若手研究者中心の編集委員会におまかせしている。初代委員長は野本茂樹研究員、今年には権藤恭之研究員が委員長である。私も時に編集委員会に顔を出す。つまり欠席が多いのだが、どうも編集委員会は欠席裁判が好きなようで、その結果、この原稿を書いている。

むかし、老人は尊敬されていたという。老人研の職員なら少しはいたわれよ、と思いつつ、日なたで昔日の老人研情報を眺めると、よなしごとが頭をかすめる。老人研でも経済の落ち込みと「改革」とは同期しているようである。

古い資料は、成果活用室で見ることができる(担当:佐藤裕子さん)。温故知新。



前川佳史デザインによる表紙



藤田喜弘デザインによるタイトルロゴ



意見百出の編集委員会

中央が権藤委員長、その右が野本初代委員長

老人研友の会 交流会

平成16年3月25日(木)

個人会員向け

時間:午後1時半～4時

会場:養育院記念講堂

内容:・研究グループ紹介
・体験交流会(健康度チェックほか)

法人会員向け

時間:午後4時半～7時

会場:老人研4階大会議室

内容:・講演会
古川 清 増殖分化制御研究グループリーダー
大淵修一 介護予防緊急対策室長
・親睦会

詳細は会員の皆さまに直接ご連絡致します。

主なマスコミ報道 (H15.7.8～12.18)

介護・生活基盤研究グループ 溝端光雄

安全運転のためのコツ(12回連載)
(日本農業新聞 H.15.7.8～10.28)
衰え自覚し安全運転 高齢ドライバー(日本経済新聞 H.15.11.17)

介護・生活基盤研究グループリーダー 高橋龍太郎

熱中症について
(J-WAVE JAM THE WORLD「15MINUTES」 H.15.8.19 21:15～)
お風呂を「健康増進ルーム」にするために
(健康ジャーナル H.15 11月号)

疫学・福祉・政策研究グループ 古名丈人

板橋区超高齢者研究の運動介入(日本経済新聞 H.15.8.23)

分子老化研究グループリーダー 白澤卓二

からだのお話「三浦雄一郎のヘモグロビン 心肺機能高める機能?」
(日本経済新聞 H.15.9.17)
音楽中枢刺激で若さを保つ
(東京医師歯科医師協同組合TMDC MATE H.15.10月号)
「長寿と老化」考<51>(日本経済新聞 H.15.10.19)
「長寿と老化」考<52>(日本経済新聞 H.15.10.26)
遺伝子操作で線虫寿命6倍(朝日新聞 H.15.12.25)

痴呆介入研究グループリーダー 本間昭

「ぼけ」は防げる 痴呆予防活動がもたらす効果に期待
(毎日新聞 PLATA H.15.10.25)
痴呆 早期発見の意義(毎日新聞 H.15.12.9)

言語・認知・脳機能研究グループリーダー 辰巳格

「IT」で若者がぼける?(毎日新聞 H.15.10.27)

痴呆介入研究グループ 矢富直美

住民と自治体を取り組む痴呆予防(介護保険情報 H.15.10月号)
痴呆予防活動のプログラムの考え方(医歯薬出版 月刊痴呆ケア H.15.10月号)

老化臨床神経科学研究グループリーダー 村山繁雄

東京都高齢者ブレインバンク(メディカルトリビューン H.15.11.6)

増殖分化制御研究グループリーダー 古川清

今、気になるTOPICS 身近で偉大な物質「糖鎖」
(シルバー新報 H.15.11.14)

介護予防緊急対策室 島田裕之

らくらく歩行術 「大丈夫」が危ない! 転倒にご用心!
(NHKテレビ 福祉ネットワーク「めざせ!介護の達人」
H.15.11.20 20:00～20:30)

グリア細胞研究グループリーダー 阿相皓晃

頭の若返りも夢じゃない!? グリア細胞(毎日新聞 H.15.11.22)

老年病ゲノム研究グループリーダー 内田洋子

「タンパク質メタロチオネイン」事故での全身まひやALS治療に応用期待
(毎日新聞 H.15.11.22)

疫学・福祉・政策研究グループリーダー 鈴木隆雄

すこやかな老後を過ごすために「骨と関節の日」記念市民公開講座
骨太の骨粗鬆症対策(産経新聞 H.15.11.23)
日本人の骨の健康-過去から未来-
(TBSラジオ Science Xitalk H.15.11.23 21:30)
お通者健診について
(日本テレビ「新ニッポン探検隊」 H.15.11.23 6:30)
高齢者の低栄養(日本経済新聞 H.15.11.30)

痴呆介入研究グループ 河合千恵子

「死別の悲しみを支えるガイド」(朝日新聞 H.15.11.27)
「死別の悲しみを支えるガイド」(毎日新聞 H.15.12.27)

痴呆介入研究グループ 権藤恭之

「長生き」と「幸せ」の二兎を追う
(NHK ラジオ深夜便 H.15.12.23)
超百歳の養生術(講談社 オブラ H.16.1月号)

痴呆介入研究グループ 稲垣宏樹

中高年から間に合う百寿者になる法
(テーマス 月刊テーマス H.16.1月号)

脳機能改善研究グループ 安藤進

全身バランス良くアンチエイジング 15の知恵と心得
(マガジンハウス 月刊ターザン H.15.12.24日号)

編集後記

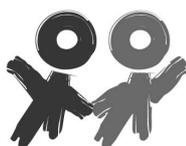
「老人研情報」は、所内から選ばれた編集委員12人によって、毎月2時間におよぶ熱い会議の末生まれる。その老人研情報も200号を迎えた。いかに楽しく読んでいただけるかがこの会議のポイント!この情報紙で「共同研究を!」とか「もっと研究の内容が知りたい!」などという話がある

ので、編集者の一人としてうれしく思う。

新年を迎え、ますます老人研は厳しい荒波に船出するが、世界に名だたる老人の総合研究所として誇りを持って研究の成果をみなさんにお伝えし続けたい!

今年も、ご支援をよろしく願います。

(眠り姫)



平成16年1月発行

編集:(財)東京都高齢者研究・福祉振興財団 東京都老人総合研究所「老人研情報」編集委員会、発行:広報委員会
〒173-0015 板橋区栄町35-2 Tel. 03-3964-3241(内線3151) Fax. 03-3579-4776

印刷:株式会社 アイフイス

ホームページアドレス: http://www.tmig.or.jp/J_TMIG/J_index.html



古紙配合率70%再生紙を使用しています